

今野敏

奏者
水滸伝

SOSHA SUIKODEN
KITA NO
SAISYUKESSEN
BY BIN KONNO

北の
最終決戦

講談社
文庫



講談社文庫

常州大学图书馆
奏者水樹伝 老の最終決戦
藏 書 庫

講談社

【著者】今野 敏 1955年北海道三笠市生まれ。上智大学在学中の1978年『怪物が街にやってくる』（現在、朝日文庫より刊行）で問題小説新人賞受賞。卒業後、レコード会社勤務を経て作家となる。2006年『隠蔽捜査』（新潮社）で吉川英治文学新人賞受賞。2008年『果敢 隠蔽捜査2』（新潮社）で山本周五郎賞、日本推理作家協会賞受賞。「空手道今野塾」を主宰し、空手、棒術を指導。主な近刊に『化合』、『同期』、『ST 沖ノ島伝説殺人ファイル』（講談社）、『警視庁FC』（毎日新聞社）、『天網 TOKAGE 2 特殊遊撃捜査隊』（朝日新聞出版）、『転迷 隠蔽捜査4』（新潮社）、『デッドエンド』（角川春樹事務所）、『防波堤 横浜みなとみらい署暴対係』（徳間書店）、『ベトロ』（中央公論新社）、『ヘッドライン』（集英社）などがある。

そうしやすい こ でん きた さいしゅうけつせん
奏者水滸伝 北の最終決戦

こん の びん
今野 敏

© Bin Konno 2011

2011年11月15日第1刷発行

2012年7月2日第3刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-276986-0

目次

奏者水滸伝 北の最終決戦

5

解 説 西上心太

291



講談社文庫

奏者水滸伝 北の最終決戦

今野 敏

講談社

目次

奏者水滸伝 北の最終決戦

5

解 説 西上心太

291

奏者水滸伝

北の最終決戦

1

羽田空港に現れたピアニストの古丹神人^{こたんかみと}は、人目を引いた。

無造作に伸ばした髪に黒々としたひげがつながっている。百九十センチ、百キロの巨体の持ち主だが、すばらしくバランスのとれた体格をしていた。

上半身、下半身ともに見事に筋肉が発達している。運動選手のように、特定の筋肉だけがいびつに発達しているのではない。そのせいで、巨漢にもかかわらず、身のこなしが実にしなやかに見えた。

ネルのワークシャツに、色あせたジーンズを身につけ、やわらかい革で作った編み上げのトレッキングシューズをはいていた。

肩にたいへん丈夫なキャンバス地でできた雑囊^{ざつのう}をかけている。荷物はそれだけだった。ワークシャツの袖をまくっているが、そこからのぞく腕の筋肉は、松の根を思わせた。シャツの肩のあたりは、筋肉によってはちきれそうだった。

「時間どおりやってきたな」

ドラマーの比嘉隆晶が、仲間のふたりに言った。

短く刈ったアフロヘア。目尻には陽気そうな笑いじわがある。体は決して大きいほうではないが、全身にぴったりと柔軟な筋肉が張り付いていて、ばねのような印象を与える男だった。

言われて、アルトサックス奏者の猿沢秀彦が古丹のほうを見た。

華奢な体格をしており、黒縁のボストン眼鏡と広い額が、その体格を強調している。音楽家というより、学者の卵といった感じがした。髪は、きちつと整えられている。三つボタンのブレザーに、オックスフォード地のボタンダウンシャツを着ており、古きよき時代のアイビリーガーを思わせる。

彼は、小心そうな眼を丸くして言った。

「見てくださいよ。古丹さんは、ずぶ濡れですよ。傘をさしてこなかったのかな？」

「そのようだな」

静かな声でベীシストの遠田宗春が言った。彼はきわめて無表情だった。ほっそりとしていて、霜柱のように冷やかなイメージがある。柔らかくくせない髪がふわりと右方向に流れて、軽く右目にかかっている。

麻のスーツに、白いシャツを着ており、ノーネクタイだった。たいへん蒸し暑い日

だったが、彼だけは不思議なことに涼しげに見えた。

彼は古丹を一瞥^{いちべつ}して言葉を続けた。

「古丹は、ありとあらゆる自然の営みに、決して逆らおうとは思わないんだ」

「そう。そういう見方もできるな」

比嘉が言った。「だが、傘を持っていなかっただけなのかもしれない」

三人の仲間のところへやって来ると、古丹はかすかにうなずいた。

これが、彼の精一杯の親しみの表現だった。

「あとは、木喰^{もくじき}上人^{しやうにん}だけですな」

猿沢が言った。

「ああ……」

比嘉は、航空会社のカウンターと反対側にあるガラス越しに空を見上げて言った。

「しかし、何ていう天気なんだ。脳みそにカビが生えちまいそうだ」

「そいつは、悪い病気のせいじゃないのか？」

遠田が言う。

「ふん。俺の日常生活は、おまえさんたちが思ってるよりずっと清らかなんだ。とにかく、このどんよりとした雲、絶えず降り続ける雨、湿気……、耐えがたいな」

「比嘉さんが生まれ育った沖縄にだって梅雨^{つゆ}はあったでしょう」

猿沢が尋ねた。

「南国の梅雨は、もっと男性的でスカツとしてるよ。東京のこの灰色の雨には参るよ。猿沢は東京生まれの東京育ちだから、何ともないんだろくな」

「そりゃ、好きじゃありませんがね……。本州の人間は梅雨からは逃げられません。遠田さんの故郷の京都だつてそうでしょう」

「京の梅雨には、それなりの趣きおもむがある。人々は、雨を楽しむことを知っている」「信じがたいね」

比嘉が言つた。「おい、古丹。北海道には本当に梅雨がないんだろくな」
古丹はうなずいた。

「道南の一部では、本州同様に降る。だが、それ以外は、ない」

「その言葉を信じさせてもらうぞ。でないと、憂鬱ゆううつでたまらん」
「おまえでも、憂鬱になることがあるのか？」

遠田が比嘉に言つた。

「そう。俺の神経は細こまやかにできている。たいていの武道家がそうであるように」
「本当だとしたら、その間だけは静かでいいだろうな」

「来ました」

猿沢がロビーのむこうを指差した。「木喰上人です」

自ら『木喰』と名乗る老僧は、いつものように、墨染めの法衣姿で現れた。五尺の錫杖を左手に持ち、右手には頭陀袋を下げている。

剃髪はしていない。頭の頂点のあたりまではげ上がっているが、残った白髪は肩まで垂れている。その真つ白な髪が雨に濡れていた。

「上人も傘がきらいなようだ」

遠田がつぶやくように言った。

「あの姿に傘は似合わないからな」

比嘉が言った。「あれで、なかなかのスタイリストなんだ」

東京発十一時十分の全日空859便、ボーイング767型機は、函館空港を目差して、軽々と離陸した。

低く垂れこめた雨雲に機首が突っ込んでいく。上昇している間、機体は揺れ続けた。古丹は、てのひらにいやな汗がにじむのを感じた。彼は、飛行機がたいへん苦手だった。乗ったとたんに、耳をふさがれたような気分になる。缶詰めの中味になったような気がするのだった。こんな天気るときはなおさらだ。やがて全日空859便は、すつぽりと雲から抜け出た。梅雨前線がもたらした厚い雲は、今は、平地に降り積もった新雪のように、眼下で白銀に輝いている。

ジェット機は、真つ青な空に浮かんでいた。太陽が翼に光を投げかけている。

古丹は久し振りに太陽と青空を見る気がした。比嘉の言い草ではないが、梅雨は、北海道育ちの古丹にとってもありがたいくない季節だった。

彼は気分がさきほどに比べ、かなり良くなったのに気づいた。飛行機に乗っていて、一番苦痛なのは、やはり離陸と着陸の瞬間なのだ。青空と太陽も、古丹の気分を軽くするのに役立つていた。

彼はようやく、ぼんやりと考えごとをする余裕を得ていた。彼ら四人のジャズマンは、北海道での演奏旅行へと旅立ったのだった。古丹は、今回の演奏旅行へ出かけることになるまでの経緯を思い出し始めていた。

古丹神人ら四人が、ロサンゼルスで開かれた『ハリウッドジャズフェスティバル』に出演したことは、帰国後も大きな影響を残すことになった。

北海道出身のピアニスト、古丹神人、沖縄出身のドラマー、比嘉隆晶、京都出身のベーシスト、遠田宗春、そして、東京出身のアルトサクソ奏者、猿沢秀彦は、それぞれの地方でのスターだった。

彼らは、旅の名物僧、木喰によって知り合い、東京でグループを組んだ。だが、彼らの活動はたいへん地味なものだった。四人は、経済的な問題をあまりかえりみず、

西荻窪にあるライブハウス『テイクジャム』だけで演奏活動が続けていた。彼らの演奏は、ジャズファンたちを魅了し、客は増え続けた。演奏日には、『テイクジャム』は、ラッシュ時の通勤電車のようなありさまだった。

当初は、週に一度だった演奏日が、今は、週に三回に増えていた。時には、一カ月間、毎日出演することもあった。彼らが出演する日は、必ず超満員となった。しかし、マスメディアが彼らに注目することはなかった。

『ハリウッドジャズフェスティバル』からの凱旋がいせんが、そのあたりの事情を一変させた。マスコミが彼らを追い回し始めたのだった。

アメリカのレーベルから発売された、フェスティバルの演奏のライブ盤が、マスコミの過熱ぶりに拍車をかけた。

テレビやラジオの出演依頼が殺到し、マネージメントを引きうける恰好になった『テイクジャム』のマスター、芥川あきたがわを閉口させた。

古丹ら四人は決して『テイクジャム』以外では演奏しないという姿勢を崩そうとはしなかったのだ。

地方からの演奏依頼も日に何本も入ってきた。芥川はついに音をね上げ、四人のジャズマンと木喰に相談した。

「もう悪役はごめんだぞ」